

## 集会的暴力の自壊

——釜ヶ崎暴動の変質過程にみる自己カテゴリー化の逆説——

吉田 竜司\*

### Self-Decomposition of Collective Violence : The Inverse Self-Categorization Process in the Declination Phase of “Kamagasaki” Riots

Ryuji YOSHIDA\*

The dynamics of riot can be divided into three phases analytically : escalation, diffusion, and declination. However, the study of the declination phase has been relatively insufficient until now. Behind this situation lies a common sense assumption which could be referred as a “mobilization/control model” about the dynamics of riot. This model sees the process of riot as the power relations between rioters and control agents. According to this view, the image of the declination phase would be reduced to the matter of mere winning or losing. When rioters reach a state of exhaustion, the control agent (police) exercises its overwhelming executive force against them and the game is over.

However, when we focus on the declination phase of riot from the rioters' side with a viewpoint based on their cognitive world, we find that a self-decomposition process is going on which is independent of the control agent's effort. Recent social-psychological research has revealed that riot can be seen as a process of collective self-categorization (social identification). Rioters express what they know about their lifeworld through their violence. Thus, their violence can be seen as symbolic-temporal-spatial boundary-taking behavior. However, the number of their target objects has certain limits due to physical constraints. For example, “Koban” (a police kiosk) that has been burnt to ash cannot be burnt down again. Then the rioters tend to attack other objects that leave more contradictory meanings for more of them. For example, though “Koban” is nothing more than enemy for all of them, it is controversial whether “Pachinko-ya” (a pinball hall) is regarded as an enemy (a symbol of the capitalistic exploitation) or not (an amusement place etc.). As a result, rioters attack various objects and, at the same time, individual units of attack attract fewer and fewer people. In this manner, the autonomous-decomposition process proceeds until the riot fragments into a few small episodes of violence.

We attempt to describe this inverse self-categorization process of riot through the analysis of a series of riot incidents which occurred in Kamagasaki, a district in Osaka, Japan with many daily labors.

けどやな、やるなら、どこいうて目的があったら、ぺっちゃんこになるまで潰してしまっ  
てやな、パッとやめた方がいいと思うよ。そやろ。<sup>1)</sup>

#### はじめに

暴動などの集会的暴力はどのようにして終息するのか。通常われわれは、暴力をつねに破壊や衝動といった無規制なエネルギーの発露として捉えがちであるため、暴力の終息は暴力を統制する作  
用の「外挿」か、あるいは暴力行使のためのエネルギーの枯渇か、そのいずれかによって終息する

---

\* 龍谷大学社会学部

以外の道筋を思い浮かべることはない。

このことは、暴動についての語りについてもあてはまる。例えば、これまで釜ヶ崎暴動に関する評価は、暴動のエネルギーや、それが地域の権力構造に対して与えたインパクト、日雇労働者の権利獲得に対する効果など、そのほとんどが暴動のいわば「武器」としての側面からなされてきた。そうした評価が前提とする暴動の動的過程についての認識は、攻撃あるいは反抗の意思表示をする暴動主体と、それを統制・鎮圧する統制側の二者間のせめぎ合いにより暴動の展開－終息過程が決定されるとする、「動員／統制モデル (mobilization/control model)」がその下敷きとなっている。したがって、暴動の衰退・終息は、統制側（警察・世論）による鎮圧・封殺のためとしか捉えられていない。

しかしながら、暴動はそれ自身、「武器」とともにいわば「降伏礼状」をも携えている。「どのような内容のものを、どのような形で要求しているのかは、たえず不問にされながら突進する虚無は、かれらの武器であるとともに降伏礼状にもなりうる不幸がからんで<sup>2)</sup>」いるのである。すなわち、暴動は、統制側による鎮圧・封殺作用との間の相互作用とならんで、それ自身のうちに「自壊 (self-decomposition)」のメカニズムを胚胎しつつ展開するのである。そしてそのとき、暴動をかたちづくる集合的暴力は「個人化」する。このことは、暴動を集合的な「自己カテゴリー化 (self-categorization)」として捉える視点から説明可能となる。

本稿では、大阪の日雇労働者集住地区である（通称）「釜ヶ崎」において、労働者を中心として過去数十次にわたって生じた暴動を事例とし、暴動の終息局面において生じる質的変化を、社会心理学における「自己カテゴリー化」理論を援用しながら説明し、暴動が胚胎する「自壊」のメカニズムを明らかにする。

## 1. 暴動の動的過程分析と終息過程への問い

暴動の動的過程に関する本格的な社会学的研究は、1970年代からはじまるといってよい。それは、「反抗の時代」であった1960年代アメリカにおける一連の都市暴動の噴出と、それらの諸事例についての詳細な資料・報告の蓄積という研究条件を背景として急速に発達した。それらは、「暴動の期間中には何が起きるのか、またどのようにして起きるのか」についての、具体的な事例に基づいた分析をとおして、暴動内部の複雑な相互作用や展開過程を明らかにしてきた。

例えば、いわゆる「DFA 仮説」と呼ばれる暴動の原因論を反証したマクファイル<sup>3)</sup>や、ロサンゼルス暴動における出来事の推移過程を時空間的にマッピングしたアブデュラの試み<sup>4)</sup>が示しているように、暴動における出来事の推移や暴動の拡がりの過程は、初発原因とされる諸変数と暴動の結果のみからその動的過程を推察するといった、単純な「入力／出力モデル」では捉えきれない、暴動内部の複雑な相互作用や展開の道筋が存在することを明らかにしてきた。

ただし、これまでそれらの諸研究が主に扱ってきたのは、暴動がその発端から、参加者・攻撃の強度を増大させ、また暴動の発生数が増加する「発達局面 (escalation phase)<sup>5)</sup>」か、暴動が一地域から、隣接または地理的に隔たった地域へと飛び火してゆく「拡散局面 (diffusion phase)<sup>6)</sup>」のいずれかであり、暴動が規模・強度ともに衰退してゆく「終息局面 (declination phase)」については、ほとんどともにとりあげられてこなかった。暴動の終息は、暴動の主役たる主体の「疲れ」や気候などの心理的・環境的要因による自然的衰退か、もしくは統制側の鎮圧による強制的終了の

ためとしてつまされてきたのである<sup>7)</sup>。

なぜなら、それらの過程論の多くは共通して、暴動の動的過程は、体制や権力へ挑戦する側の反抗作用と、それを鎮圧しようとする側の統制作用とのあいだの作用／反作用によって決定されるとする、「動員／統制モデル」を暗黙の前提にしてきたからである。こうした前提に立つかぎり、暴動内部の相互作用は、あらかじめ固定的な意図・目的を有した、関与する諸主体間の社会的勢力をめぐる綱引きのようなイメージで捉えざるを得ず、暴動の終息局面は、たいていの場合、挑戦者側の一方的な負けにいたる、(幾分面白みのない)衰退要因の外挿で説明がすむと思われるのであ<sup>8)</sup>。しかし、そのような「動員／統制モデル」は、暴動の動的過程研究にとって、次の2点において問題点を有する。

「動員／統制」モデルの問題点の第一は、それが群集による攻撃対象の選択過程から統制作用を分離する点にある。

場合によれば、のべ数十時間にもおよぶ暴動の期間中で、そのほとんどの時間を占めているのは、散発的な投石を含む「対峙」の時間である。その「対峙」の時間のなかで、目立たない(目に見えない)駆け引きがおこなわれ、それが次の攻撃対象を準備する。そうした目立たない駆け引きのうちには、群集と警官隊を画する「前線」の攻防、群集の罵声、個人的な、あるいは小集団による攻撃の試み、私服警察官による内偵・検挙などが含まれる。また、本稿で示されるように、群集による攻撃対象の変化(拡散)は、しばしば、警察による鎮圧行動の圧力から逃れるときに生じる。警察による鎮圧は、群集にとって、それまでの対象への攻撃の可能性を閉ざすという意味で、次の攻撃対象の選定を、少なくとも消極的には条件づけているのである。

このように、群集による攻撃対象は、あくまで統制側との相互作用のなかで選ばれるのであって、あらかじめ定まった対象を攻撃しようとする群集と、それを阻止しようとする統制側による「綱引き」のみが暴動の動的過程の内実なのでは決してない。

「動員／統制」モデルの問題点の第二は、それが暴動の終息因をもっぱら統制側の作用のみに帰する点にある。

このモデルにしたがえば、暴動の衰退・終息は、世論による社会的批判と、それを受けた警察による鎮圧行動によってのみ説明されることになる。このような動的過程認識は、攻撃対象の選択過程から統制作用を分離するという認識視座と表裏一体の関係にあるといえる。

しかしながら、暴動の終息過程も、統制側がそのようにしむける(文字通り暴動を「コントロール」する)という可能性も含めて、統制側との相互作用のなかで決定づけられる。しかも、警察暴動に対する研究をはじめとする、暴動統制側に対する一連の研究<sup>9)</sup>が明らかにしているように、警察自体が暴動の主役となることや、また警察による鎮圧・示威行動が暴動のきっかけとなることもあるばかりか、暴動期間中で最も暴力的な主体は、しばしば統制側とされる警察自身なのである。暴動期間中における警察は、決して「単なる社会統制の中立的な機関ではない<sup>10)</sup>」<sup>11)</sup>。同様の事情は、暴動に関与するあらゆる主体に対して当てはまる。暴動の行方を見守る第三者たる公衆が、暴動の推移につれて中立から鎮圧要求へと立場を変化させたり、しばしば暴動の主役たる群集自身のあいだから、「厭戦気分」が表明されることもあるのである。

このように、暴動の動的過程を具体例に即して詳しくみてゆくなら、群集にとって、あらかじめ定まった攻撃対象などありはしないし、そのような対象への攻撃を阻止しようとする統制側の作用

のみによって暴動が終息へ向かうわけでもないということがわかる。暴動期間中に起こるほとんどのことは、暴動に関与するさまざまな主体間の相互作用を通して決定されるのである。

## 2. 釜ヶ崎暴動・概観

### 1) 釜ヶ崎と暴動

日本最大の「寄せ場」である「釜ヶ崎（あいらん）」地区は、大阪市西成区の北東端に位置する広さ 0.62 km<sup>2</sup>、西成区全体の 8.4% を占めるだけのごく狭い地区であるが、このなかに推定で約 21,000 人の日雇労働者を含む約 30,000 人<sup>12)</sup>（西成区全体の 20% 強）が暮らす、非常に人口密度の高い地区である。また日雇労働者のほとんどが単身の男性であり、彼らの多くが止宿する日払いの簡易宿泊所（ドヤ）が密集する地区でもあることから、「ドヤ街」とも称される。

このような釜ヶ崎において、昭和 36 年（1961）以来平成 4 年（1992）までの間に、日雇労働者の警察に対する攻撃を中心とする「暴動」が過去 20 数回生じている。そして平成 20 年（2008）6 月、もはや起こるはずがないと思われていた暴動が、再び起こっている<sup>13)</sup>。それら諸暴動の発端は、日雇労働者の地元警察（西成署）に対する不満や、寄せ場における就労を斡旋する手配師や地区飲食店員とのトラブル、火事に対する消防車の出動の遅れや、パチンコ屋の玉の出が悪いなど、どれも地区の日雇労働者の生活と密接に関わる出来事ではあるが、じつにさまざまである。

同様に、何をもって釜ヶ崎における暴動とみなすかは、釜ヶ崎においては一意的に決定することは難しい。

例えば西成警察署は、「集団不法事案に発生するおそれのある概ね 50 人以上の集団（集合）」を「い集事案」として処理し、それらのうち暴動にまで発展したものを「集団不法事案」と名付けている<sup>14)</sup>。その件数は、昭和 36 年（1961）の第一次暴動以降、平成 4 年（1992）年までの間に 23 件が数えあげられている。また、西成労働福祉センターが設立された当初（1962 年～）に職員であった釋智徳が作成した釜ヶ崎における暴動の年史によると、昭和 36 年（1961）から昭和 47 年（1972）までの間に 20 回の「釜ヶ崎暴動」が数えあげられている<sup>15)</sup>。この両者による整理を比較してみると、多少の食い違いがみられ、暴動であるかどうかの認知には、たんに程度の差だけではない、両者の立場上、定義上の認識のズレが推察される<sup>16)</sup>。

このように、釜ヶ崎における暴動の認知は、各論

表①：釜ヶ崎暴動の発生回数

|              | 釋* | 警察** | 新聞*** | 日数*** |
|--------------|----|------|-------|-------|
| 1961. 8. 1   | 1  | 1    | 1     | 4     |
| 1963. 5. 12  | 2  |      |       |       |
| 1963. 5. 17  | 3  | 2    | 2     | 1     |
| 1963. 12. 31 |    | 3    | 3     | 1     |
| 1966. 3. 15  | 4  | 4    | 4     | 1     |
| 1966. 5. 28  | 5  | 5    | 5     | 3     |
| 1966. 6. 21  | 6  | 6    | 6     | 3     |
| 1966. 7. 11  | 7  |      |       |       |
| 1966. 8. 20  | 8  |      |       |       |
| 1966. 8. 26  | 9  | 7    | 7     | 1     |
| 1966. 9. 26  | 10 |      |       |       |
| 1966. 10. 16 | 11 |      |       |       |
| 1967. 6. 2   | 12 | 8    | 8     | 4     |
| 1970. 12. 30 |    | 9    |       |       |
| 1971. 5. 25  | 13 | 10   | 9     | 5     |
| 1971. 6. 13  | 14 | 11   | 10    | 5     |
| 1971. 9. 10  |    |      | 11    | 2     |
| 1971. 9. 11  | 15 | 12   |       |       |
| 1972. 5. 1   | 16 | 13   | 12    | 1     |
| 1972. 5. 28  | 17 | 14   | 13    | 2     |
| 1972. 6. 28  | 18 | 15   | 14    | 6     |
| 1972. 8. 13  | 19 |      |       |       |
| 1972. 8. 15  |    | 16   |       |       |
| 1972. 9. 11  |    | 17   |       |       |
| 1972. 10. 3  |    | 18   |       |       |
| 1972. 10. 10 | 20 | 19   | 15    | 2     |
| 1973. 4. 30  |    | 20   | 16    | 2     |
| 1973. 6. 14  |    | 21   | 17    | 3     |
| 1990. 10. 2  |    | 22   | 18    | 6     |
| 1992. 10. 1  |    | 23   | 19    | 3     |
| 2008. 6. 14  |    |      | 20    | 4     |

\*釋 [1973：92-166] より作成

\*\*大阪府西成警察署防犯コーナー [1993：27] より作成

\*\*\*新聞記事によって確認できたもの

者の立場や問題関心によってまちまちであり、なんらかの定性的な定義に基づいて決定することが困難である<sup>17)</sup>。そこで本稿では、釜ヶ崎における日雇労働者を主体とした集合的な紛争を、公的認知という軸と絡ませて操作的に「暴動」と定義する。具体的には、警察と釋による整理のなかで指摘されている諸事例をもとに、新聞報道によって確認されたもののみを「暴動」としてカウントする。用いた新聞は、『朝日新聞（大阪版）』・『毎日新聞（大阪版）』・『読売新聞（大阪版）』・『産経新聞（大阪版）』の4紙であり、暴動期間中の出来事の分析にも、基本的にこの4紙における記事を用いる。以下本稿では、こうしてカウントされた20回の暴動を「釜ヶ崎暴動」として扱う〔表①〕。

## 2) 暴動発生 of 2 つの「波」と問い

このように定義したうえで、表①より釜ヶ崎における暴動の発生状況をみみると、暴動の発生頻度に2つの大きな「波」があることがわかる。まず発生件数を年次別にみた場合、第一次暴動以降、昭和41年（1966）から昭和42年（1967）にかけてと、昭和46年（1971）から昭和48年（1973）にかけての二度、暴動が集中的に生じる期間があったことがわかる。しかも、数日間にわたる暴動のほとんどがこれら2つの「波」のなかに収まっていることから、暴動の頻度・強度の両面で、この2つの時期は大きな「波」を形成していたことがわかる<sup>18)</sup>。

このような2つの「波」の存在は、われわれに、いくつかの問いを惹起させるだろう。それらは次の、相互に関連する3つの問いにまとめられる。すなわち、

### (1) 発生過程

なぜ、「波」が生まれたのか。つまり、なぜある時期に暴動が集中的に生じたのか。このような「波」の存在は、それぞれの暴動が、全く偶発的に生じたとは言いきれない、何らかの「原因」に基づいているのではないかという問いを呼び起こす。これは、個々の暴動の発生の説明とも関わる、暴動の「波」の発生因に対する問いである。

### (2) 終息過程

なぜ、「波」が収まったのか。つまり、なぜある時期に集中的に生じた暴動がそれ以後生じなくなったのか。これは、個々の暴動が終息に至る過程の説明とも関わる、暴動の「波」の終息因に対する問いである。

### (3) 変質過程

2つの「波」はそれぞれどのような性格を持っているのか。同じなのか、違うのか。違うとすれば、それはどのような違いであり、その違いは何に起因するものなのか。これは、(1) (2) の問いとも関わる、暴動の「波」の質的变化に関わる問いである。

これらの問いは、本来それぞれが個別に研究されるべき大きなテーマであるのだが、暴動の終息過程に注目する本稿では、(2) の説明に重点を置くこととなる。そしてそのことは、その他の問いにある程度答えることともなるだろう。

これほど多くの暴動が、ごく狭い一地域で繰り返し生ずることによって、暴動自体にどのような性格の変化が生ずるのか。釜ヶ崎暴動を、地域史的観点から捉えることで、その変質過程を整理した平川は、釜ヶ崎暴動を3つの時期に整理している<sup>19)</sup>。

第一は、昭和36年（1961）から昭和41年（1966）までの時期（本稿の時期区分では「第一の波」と重なる）で、その自然発生的な性格と、暴動直後の行政的対応が日雇労働者の権利獲得に寄

与した点から、この間に生じた暴動をホブスボーム<sup>20)</sup>に倣って「暴動を通じた団体交渉」と性格づけている。

第二は、昭和44年(1969)から昭和46(1971)までの時期(本稿の時期区分では「第二の波」の前半と重なる)で、共産党系の労働組織「全港湾労組関西地方建設支部西成分会」の結成とその運動展開がなされ、暴動がより組織的な性格を見せ始めた点から、「労働者による権利意識の高まり」の時期と性格づけている。

第三は、昭和47年(1972)から昭和48年(1973)の時期(本稿の時期区分では「第二の波」の後半と重なる)で、全共闘以降釜ヶ崎に流入してきた学生活動家を中心として結成された「暴力手配師追放釜ヶ崎共闘会議(釜共)」が、運動戦略の一環として暴動を積極的に「指揮」しようとした点から、この間に生じた暴動を「『独特の』労働運動(非制度的・非日常的なもの)」と性格づけている。

平川による釜ヶ崎暴動の質的区分は、釜ヶ崎における日雇労働をめぐる情勢の変化、それぞれの時期における代表的な暴動のきっかけ要因、初期段階での攻撃の性格、また事後的な行政対応との関係の点から整理されている。そのなかで、とりわけ労働組合や学生活動家による日雇労働者の組織化と、それにともなった労働者の権利意識の高まりが暴動の質的变化に与えた影響を重視している。そのような観点から捉えた釜ヶ崎暴動の質的变化とは、一言でいえば、「自然発生的な抗議行動」から「多少とも組織化され、労働運動に近い性格を持つもの」への変化であったということができよう。

たしかにこのような歴史的評価は、暴動の主体となる群集を、固定的な意図を有した運動体として捉える限りではもっともなものといえる。けれども、そこには、暴動の内実を構成する個々の出来事の連鎖に対する分析への視点が抜けている。

確かにこれら2つの「波」のそれぞれを「一枚岩」として捉えて、その全体として性格づけるならば、このような把握もあながち外れてはいないといえるが、2つの「波」それぞれのなかで生じた暴動の事例をひとつひとつ辿っていけば、地域史的な性格づけとは別の水準における質的变化を見いだすことができる。それは、暴動が繰り返されることや、ひとつの暴動が数日間に及ぶこと自体が引き起こす質的变化である。

このような暴動の過程論への問いは、上記の歴史的評価とは別の水準の問いである。そして、そのような視点から分析した釜ヶ崎暴動の終息過程は、結果的に平川の描きたかった像と逆説的なかたちで結びつくことがわかるだろう。そこで本稿では、釜ヶ崎暴動の攻撃プロセスにみられるパターンの分析を通して、暴動の「波」の終息過程についての説明を試みる。

### 3) 代表的な暴動の諸事例

以下では、数十次にわたる釜ヶ崎暴動をとおして見られる攻撃の共通性と相違点を分析するための素材として、暴動の2つの「波」を特徴付ける事例という観点から、代表的な暴動の事例を紹介する。

#### 【第一次暴動 昭和36年(1961)】

8月1日午後8時50分、釜ヶ崎北東端の霞町交差点付近で、一人の日雇労働者がタクシーには

ねられた。事故処理に当たった警官は、被害者が死亡したものと見なし、筵をかけて実況検分を始めた。この時付近にいた労働者達が「まだ生きてるやないか」「俺たちを人間扱いしろ」と騒ぎだし、事故現場向かいの東田町派出所前に約 1,000 人が集まった。その後群集は、駆けつけた機動隊との小競り合いを繰り返しつつ、タクシーの放火、同派出所への投石、パトカー、鑑識車等への放火へと発展し、翌午前 5 時、警察による催涙弾の使用によって収まる。

8 月 2 日午後 8 時過ぎ、西成警察署前に群集約 2,000 人が集まり、投石を始める。これが武装警官によって鎮圧されると、次に阪堺線の線路を占拠し、電車に対する投石を始める。その後霞町交差点付近において通りがかりの自動車に対する放火、付近の派出所に対する放火、さらに国鉄や市電に対して投石を行う。また、派出所の消火に駆けつけた消防車に対する放火や、暴れ出したヤクザへの投石も生じる。この日も翌午前 5 時、警察による排除によって収まる。

8 月 3 日午後 7 時過ぎから西成署前に約 2,500 人が集まり、投石を始める。午後 10 時前、西成署北の路上で焚き火をし、集まっていた群集約 3,000 人は警官隊による徹底的な実力行使によって鎮圧される。

8 月 4 日も、前日同様の展開を示すが、投石のために集まった人数は格段に減っており、午後 11 時前に警察による排除を最後に騒ぎは収まる。

この一連の暴動騒ぎのなかで、戦後初めて「騒擾罪」の適用が検討された。

#### 【第八次暴動 昭和 42 年（1967）】

6 月 2 日午後 9 時 20 分、「釜ヶ崎銀座」に面した「丸福食堂」で、酒など 70 円あまりを無銭飲食した日雇労働者の頭を店員がこづいたところ、周りにいた労働者が「なぜ殴った」と騒ぎだし、付近にいた労働者が同食堂に石やビールビンを投げ始め、店内を破壊する。また店頭の冷蔵庫も道のまん中へかつぎだして破壊する。午後 10 時過ぎには約 2,000 人にふくれあがった群集は、駆けつけた機動隊や、装甲車に対して投石するが、翌午前 2 時前に収まる。

6 月 3 日午後 6 時頃、「丸福食堂」前に集まった群集は、警官隊の動きに合わせてつ約 2,000 人となり、霞町交差点付近でビールビンや石を警官隊に対して投げる。午後 8 時半には阪堺線南霞町駅を占拠し、駅北側ガード下の車や、ホーム内に投石する。翌午前 0 時過ぎには、約 500 人が機動隊とにらみ合い、散発的に投石をする。その後西成署に引き上げる機動隊について行った約 100 人も、機動隊によって追い散らされ午前 2 時には収まる。この日の投石の最中に打ち上げ花火が数発上げられている。

6 月 4 日午後 6 時過ぎ、「丸福食堂」前に集まりだした労働者は座って待っている。午後 8 時 25 分頃、南霞町駅付近に集まった約 1,000 人が踏切を占拠し、電車を止め、降りてきた乗客を小突く。また新今宮駅や、通りがかりの自動車にも投石をする。午後 8 時 50 分頃には、「丸福食堂」向かいの食堂「満寿味屋」を約 500 人が取り囲み投石し、陳列ケースから煙草を奪う。午後 11 時過ぎには、萩之茶屋商店街の約 30 店が投石される。またその先の萩之茶屋派出所にも約 100 人が投石し、向かいの「朝日理容店」のガラスも割られる。翌午前 0 時 30 頃、機動隊による実力行使があり、午前 2 時頃霞町交差点付近の約 100 人も追われ、収まる。

6 月 5 日は、散発的な小競り合いが機動隊との間であったのみで 4,000 人の機動隊によって鎮圧される。

### 【第九次暴動 昭和46年（1971）】

5月25日午前5時20分頃、あいりん総合センター前で、他の労働者による割り込み乗車のために、職安発行の整理券を持ちながら港湾荷役の就労バスに乘れなかった労働者が中心となって「不公平だ」と騒ぎだし、約120人が港区の営業所まで電車を無賃乗車して押しかけ、交渉の末「ご苦労賃」として一人2,000円を受け取って釜ヶ崎へ帰ってきた。午後7時頃に、活動家4人が「悪徳手配師を放置する西成署に抗議しよう」と呼びかけ、約150人が新今宮駅からデモのような形で西成署まで行進した。これに仕事帰りの労働者が合流し、午後11時半頃、約2,000人が西成署前に集まった。翌午前0時過ぎ、群集内の約30人が同署裏口に回って投石を始め、さらに午前0時10分頃、手ぬぐいで頬かむりした「過激派」らしい5人がコンクリートの固まりを割って投げる。また同署前の軽自動車もひっくり返された。この頃全港湾西成分会から「逮捕されても黙秘せよ」とのビラがまかされている。午前1時半過ぎ、機動隊と私服警官による実力行使によって収まる。

5月26日午後7時過ぎ、西成署前に約500人集まる。午後8時半頃、群集の内数10人がパチンコ店「松竹ホール」のパチンコ台や表のガラスを叩き割る。これをきっかけに各所で投石、放火騒ぎが続発する。その後、午前0時過ぎまでの間に、パチンコ店「第一ホール」、西成消防署海道出張所、民家、電話ボックスへの投石、阪堺線今池ガード付近の枕木に放火、電車に投石、自動車に投石・放火、あいりん総合センターのシャッターを破損等々の攻撃が地区内各所で生じる。新聞はこの様子を、群集が「ゲリラ化」したと報じている。深夜には次第に引き始め、平静にかえる。

5月27日は朝から雨。午後7時頃から、西成署前や、萩之茶屋商店街に約150人が集まるが、機動隊に向けてヤジやビールビンが散発的に投げられただけで、午後10時には静まる。この日、あいりん総合センター前で、「赤軍派」と書いたヘルメットが見つかる。

5月28日午後6時半頃、約1,000人が西成署前に集まり、投石をする。その後あいりん総合センター前で自動車の妨害、南海今池駅付近で電車の妨害をする。午後10時過ぎ、南海天王寺線の踏切に悪戯、酒店のシャッターを蹴ったりする。午後11時頃には、同日昼から御堂筋で行われていた沖縄返還協定阻止デモを流れ解散した学生風の男女が次々と姿を現す。同じ頃、愛隣会館前で火炎瓶2本が投げられ、自動車が放火される。翌午前0時過ぎには、警察の徹底的な鎮圧で収まる。

5月29日午後6時過ぎから西成署前に集まりだした群衆は、2,000人にふくれあがり、午後8時半頃投石が始まる。機動隊の規制に対して、午後10時頃には群集は半減し、午後11頃収まる。

### 【第十次暴動 昭和46年（1971）】

6月13日午後8時頃、簡易宿泊所「日の本」の主人が宿泊客を殴ったことがきっかけとなって、労働者1,200人近くが集まり、投石する。一部労働者は、ドヤ内に乱入し、台所などを壊す。近くのドヤにも投石する。午後11時過ぎに、約100人が南海天王寺線の踏切に集まったため、運休する。翌午前1時過ぎには収まる。

6月14日午後7時過ぎ、「日の本」前に500人近く集まる。その後群集は数を増やし三角公園、萩之茶屋商店街の商店、南海天王寺線の電車に投石する。午後8時頃、三角公園脇の古物商「八木商店」に約30人が乱入、陳列ケース内の古時計約150個、指輪60個を奪う。午後8時40分過ぎ、新世界通天閣付近に約200人が現れ、2グループに分かれて付近の商店に投石する。また霞町交差点付近のバス、自動車にも投石した。

6月16日午後7時半頃、「新日の本」三階の女の泊まり客が、路上で賭博していた男と口論し、女が植木鉢を投げたことがきっかけで、約300人が同旅館に押しかけた。午後8時半、約200人が西成署前で警官に対して投石する。午後11時頃、新今宮駅周辺に約300人が集まり、機動隊に投石、26号線に駐車していた自動車に放火、阪堺線今池駅付近にも約300人が集まり、電車に投石した。

### 3. 暴動の反復と拡散

#### 1) 第一次暴動と基本的レパトリー

第一次暴動は、警察による日雇労働者の取り扱いをめぐるトラブルをその発端とし、4日間にわたって「俺たちも人間だ」という主張が一貫して攻撃の正当化の資源として用いられた暴動であった。そしてこの暴動の参加者としては、初日にヤクザ（＝手配師）が加わる場面があるが、3日間を通して主役はあくまで釜ヶ崎の日雇労働者（＝たちんぼ）であったこといえる。つまり、第一次暴動は、釜ヶ崎の日雇労働者によって「所有」されていたのである。

「チュウや。今夜もおもしろいで…」一杯三十円、一串五円の臓物をばくつきながら、赤銅色の半裸の男が叫ぶようにいった。…この飲み屋に集まった連中の話題は、前夜の事件を誇らしげに語り合うことばかり。<sup>21)</sup>

さらに、第一次暴動で見られた労働者による攻撃が日雇労働者にとって有していた意味の点から捉えるならば、それらは、日常的に釜ヶ崎の日雇労働者に対して「社会外の社会」として扱う「世間」のまなざしの象徴に対する、かなり規範的な攻撃であったと結論づけることができる<sup>22)</sup>。そのもっとも典型的なエピソードは、次のようなものである。

東田町派出所のヨコに喫茶店、司法書士事務所があるが、司法書士事務所にばかり石が投げつけられているのに、絵ガラス張りの喫茶店には一つも当たっていない。<sup>23)</sup>

三十六年の騒動の場合には、私有財産に向かってなんの暴力も加えられなかった。シャッターをおろす商店もなかった。<sup>24)</sup>

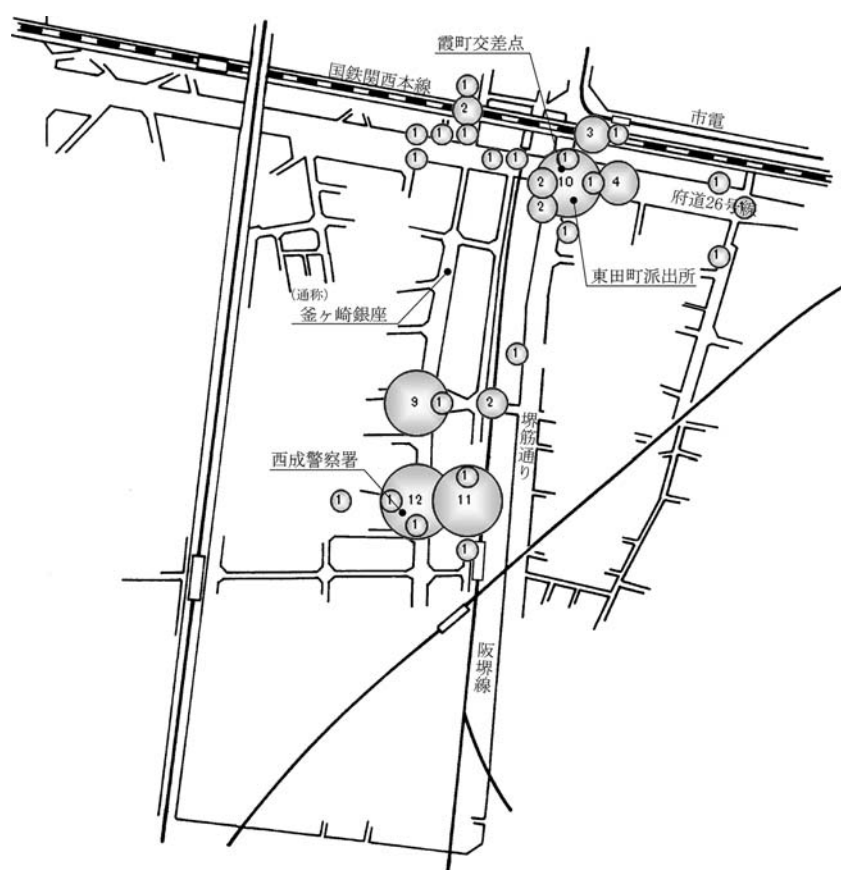
また、暴動における攻撃対象を地図上にマッピングすると、唯一の例外を除いて、ほとんどの攻撃が、釜ヶ崎の地区内で、とくに釜ヶ崎の地理的境界で生じていることが分かる。第一次暴動を報じた4紙の新聞記事から、時間と場所の特定が可能な出来事を取り出し、重複を可能な限り排除した結果、4日間で合計78のエピソードを見分けることができた。図①は、それらを釜ヶ崎の地図上にマッピングしたものである。ここからわかることは、エピソードが集中する地点は比較的限られており、事件の発端となった霞町交差点、通称「釜ヶ崎銀座」と呼ばれる西成署沿いの地区目抜き通り、それに地区東端を区切るように走る阪堺線沿いに集中している。また、通りがかりの自動車に対する攻撃も、ほとんどが釜ヶ崎の北端を区切る26号線と東端を区切る堺筋において起きている。

こうしたことから、少なくとも第一次暴動においては、攻撃対象の選定には、寄せ場としての釜ヶ崎の空間的、象徴的カテゴリー化のメカニズムが働いていたと結論づけることができる。つまり、攻撃を通して、暴動の主役たる日雇労働者は、自らの社会的アイデンティティを、そのような象徴への攻撃を通して確認していたといえる。そして、その後の暴動において継承される、第一次暴動時の攻撃対象、すなわち警察や電車、自動車は、そうした彼らの社会的アイデンティティの最大公約数として、もっとも広く支持を集めるものであった。逆に言うと、そのような対象に対する攻撃は、彼らの社会的自己概念を最も際立たせたのである。

第一次暴動以降の釜ヶ崎暴動のほとんどにおいても、警察や電車、自動車に対する攻撃を含んでおり、第一次暴動において見られた基本的な攻撃パターンを踏襲している。その意味でここでは、釜ヶ崎における暴動の変質過程を捉える際に、第一次暴動（1961年）を全ての釜ヶ崎暴動のプロトタイプとして位置づけることが可能である。

このような釜ヶ崎第一次暴動の展開過程から読みとれる釜ヶ崎暴動の基本的レパートリーと攻撃のパターンは、以下の6点である。

- ・一日ごとの暴動には、午後7時ないし8時頃からはじまり、翌午前2時ないし3時頃に終息するというサイクル（「暴動の一日（riot day）<sup>25)</sup>」）がみられる。
- ・初日の攻撃対象は、その後引き継がれる傾向にある。



図①：第一次暴動（1961年）におけるエピソードのマッピング

- ・攻撃対象は、西成署に加えて、地区の北東端の地理的境界上に集中する傾向がある。
- ・暴動の継続とともに、攻撃対象がさまざまなものへと拡散していく傾向がある。しかもその拡散は、警察による鎮圧行動の圧力から逃れるときに生じやすい。
- ・いったん拡散した攻撃対象は、暴動が継続するなかで引き継がれる傾向にある。
- ・拡散した攻撃対象に対する群集の規模は、縮小する傾向にある。

## 2) 暴動の拡散＝個人化

こうした、第一次暴動にみられる暴動の基本的レパートリーと攻撃のパターンは、その後の暴動においても繰り返しみられる。しかしながら、暴動が繰り返されるなかで、攻撃対象やその内容が明らかに変質してくる。そのことを象徴するのが、暴動の「第一の波」の後半（1967年）以降、新聞記事にしばしば登場するようになる「ゲリラ」という表現である。例えば、1967年の第八次暴動3日目の様子を伝える『読売新聞』紙上では、「まるで“ゲリラ”」の見出しの下に、次のように報じられた。

四日夜は警官隊が出動すると一目散に逃げ、手薄な方へ移動して騒ぐ。まるでゲリラ隊のように少人数に分かれ、商店、派出所、駅と手あたり次第に攻撃した。<sup>26)</sup>

1971年の第九次暴動2日目の『読売新聞』紙上では、「無法の西成ゲリラ」の見出しの下に、次のように報じられた。

“ゲリラ戦術”に出た暴徒たちは西成署を中心に百五十メートルの半径で走りまわり、手当たりしだいにしまった商店のシャッターをたたきこわし、警備の警官めがけて投石するなどまるで“通り魔”だった。<sup>27)</sup>

暴動は繰り返されるなかで「ゲリラ化」するようになるのである。こうした暴動の変質過程を捉えるため、ひとつの暴動が複数日にわたる場合、それを暴動の「継続」、またそれぞれの「波」のなかで諸暴動が繰り返されることを暴動の「反復」と呼び、それぞれの視点から暴動における攻撃対象に注目し、その変化を辿っていくと、以下のような指摘ができる。

### 【継続】

- ・初日の攻撃対象は、その後引き継がれる傾向にある。
- ・暴動の継続とともに、攻撃対象がさまざまなものへと拡散していく傾向にある。
- ・いったん拡散した攻撃対象は、暴動が継続するなかで引き継がれる傾向にある。
- ・拡散した攻撃対象に対する群集の規模は縮小する傾向にある。

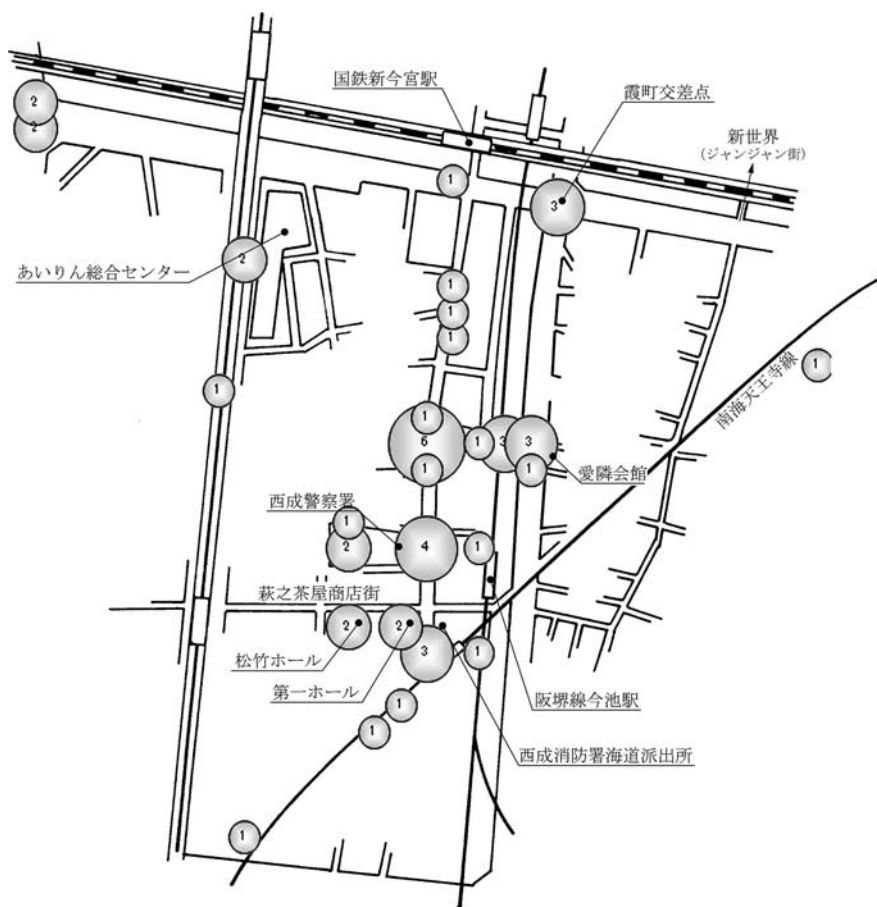
### 【反復】

- ・2つの「波」を通して、第一次暴動で見られた攻撃の基本的なパターンは継承されている（警察、自動車、電車）。
- ・暴動の反復とともに、攻撃対象がさまざまなものへと拡散していく傾向にある。

- ・いったん拡散した攻撃対象は、その後の暴動において引き継がれる傾向にある。
- ・暴動の反復とともに、ひとつの攻撃における群集の規模が縮小し、組織化したとみなせるエピソードが多くなる傾向がみられる。

このように、釜ヶ崎暴動の変質過程は、暴動の継続の点からも、反復の点からも極めて似たパターンを示している。それは「攻撃対象の拡散」と「攻撃単位の小縮小」としてまとめることができるだろう。このうち前者に関して、第九次暴動におけるエピソードのマッチング結果を示しておく[図②]。第一次暴動で確立した基本的レパトリーに加えて、攻撃地点が空間的に拡散している様子がわかるだろう。こうした変化は、釜ヶ崎暴動の場合、新聞報道によって「騒ぎの悪質化」と報じられている。そしてこのような道徳的価値判断と馴染み易い社会心理学的説明は、「社会的促進」の概念に求められるだろう。

暴動における攻撃対象の拡散を「社会的促進」の概念で説明するとき、暴動の変質過程に対するイメージは以下のようなものとなろう。すなわち、暴動が継続、または反復されるなかで、群集内の個々人の心理的抑制の「籠が外れ」、それに基づいた他者（扇動者！）の行動を社会的承認と認めた他者の行動も「籠が外れ」、結果として群集は「調子に乗る」というものである。したがって、



図②：第九次暴動（1971年）におけるエピソードのマッピング

群集の行動は、統制側の強力な鎮圧によらなければ、どこまでもエスカレートし、最後には社会的な衣をはぎ取られた「獣」の集団として際限のない破壊行為に至ることになる。

だが、このようなル・ボンのようなモップ観は、あまりにも皮相で面的である。まずこのような説明では、攻撃単位の小縮小の事実を説明することができないし、また、個別の暴動の終息は統制の強化によって一元的に説明されることがとりあえずは可能であるにせよ、マクロな暴動の「波」、とりわけその「波」の終息の説明もできない。そこで、このような捉え方に対して、本報告では、暴動における攻撃対象の拡散を、単なる規範の弛みによるエスカレートとしてではなく、拡散には拡散の「論理」があり、それは同時に暴動自身が、その集合的なエネルギーを失っていく過程でもあることを指摘する。

#### 4. 暴動の「自壊」

##### 1) 暴動の拡散と自己カテゴリー化

このような釜ヶ崎暴動の基本形が拡散するとき、そこにはどのようなメカニズムが働いているのか。釜ヶ崎暴動の継続の側面における暴動の拡散と攻撃単位の小縮小という傾向は、J・ターナーらの主張する「自己カテゴリー化」理論<sup>28)</sup>を用いるならば、うまく説明することができる。これは個人が集団として行動することを、自己の社会的カテゴリーの認知過程であると捉えて、そこに働く心理的メカニズムに関する仮説命題群を構成した理論である。

そのなかで提起されている重要な命題として、「メタ・コントラストの原理」がある。これは、個人が複数の準拠集団のなかからどれを状況に応じた準拠集団として選択するかについての仮説である。それによると、自己がどの集団に属していると感じるか（内集団成員性）は、その時々状況内で利用可能な社会的比較によって変化するが、その比較作業は、「メタ・コントラスト比」として示すことができる。これは、「あるカテゴリーとして1つにくくられる『ひとまとまり』とされるものとそれ以外のものとの差異と、『まとまり』の中での差異との比率<sup>29)</sup>」のことをいう。つまり、ある集団内の差異が、その集団と他の集団との差異よりも小さいと判断されるとき、この差異同士の比率の評価、すなわちメタ・コントラスト比に基づいて、自己は前者の集団に属する者として認知されるわけである。それはちょうど、クラスター分析における群平均法によるクラスター化の過程に似ている。

この、メタ・コントラスト比に基づいた集団カテゴリー化の動的な過程は、とりわけ制度化された状況定義資源が揺らいだ群集状況におけるふるまいを説明する際に有効とされる。例えばライカーは、この自己カテゴリー化理論を用いて、イギリスのブリストル暴動の説明をおこなっている<sup>30)</sup>。彼は、1980年にイギリスのブリストルで生じた「セント・ポール暴動」における群集行動の時空間的パターンの分析をおこなった。これは、地区のカフェへの麻薬・不法飲酒摘発に端を発する、地元住民と警察との衝突事件である。彼はこの暴動に関する報道、写真、インタビュー等を用いて暴動を再構成するなかから、攻撃にみられる明らかな規範性に注目する。例えばそれは、攻撃の警察に対する限定性、地区の地理的境界内に限定された攻撃、境界地帯に築かれたバリケード等であった。このような事実の分析を通して彼は、群集による攻撃は、彼らがそれを通して自らの社会的アイデンティティ（＝「セント・ポールアイデンティティ」）を確認する形でおこなわれたと結論づける。この分析では、攻撃にみられる規範性を、カテゴリー化の帰納的過程を通した、日

常の社会的アイデンティティの確認という「再配置」によって説明されているといえる。

そして、この「メタ・コントラストの原理」を念頭に置いて、暴動の継続・反復に伴ってみられる攻撃対象の拡散を具体的に見てみると、例えば、西成署への投石からパチンコ店への投石、またパチンコ店への投石から商店街への攻撃といったように、多くの事例において、日常の利害関係の少ない対象から、多くの日雇労働者にとって利害関係を残した対象へと拡散していることが分かる。攻撃の拡散は、ある一定の方向性、すなわち「メタ・コントラスト比」を下げる方向で生じているのである。

なぜこのような攻撃の拡散が生じるのかについては、さしあたって、2つの理由を指摘可能であろう。ひとつは、釜ヶ崎暴動が空間的な自己カテゴリー化とつねに結びついて展開することに伴う攻撃対象の払底に求めることができるだろう。燃え尽きた派出所はそれ以上攻撃できない。ガラスを割り尽くしたパチンコ店へそれ以上投石することは無意味である。こうして、多くの者にとっての敵として一意性の高い攻撃対象から、立場によって多様な意味を有した、あるいはアンビバレントな意味を帯びた、より多義的な対象へと順次攻撃の矛先が移っていくのである。もうひとつの理由として、同じ対象への攻撃が続くことによる限界効用の逓減もあるだろう。まるで要塞のように防備堅固な西成警察署への投石は効果を実感しづらく、やがてマンネリ化する。その結果、投石対象は付近のより多義性を帯びた対象へと逸れていくとするのである。

その結果暴動はもはや、多くの日雇労働者が所有するものではなくなり、攻撃単位は縮小していき、暴動は「ゲリラ化」していくのである。その延長線上に、1971年6月の第十次暴動における商店からの略奪があった<sup>31)</sup>。

同八時ごろ、三角公園わきの東萩町、古物商「八木商店」…に約三十人の男が乱入、展示ケース内の中古時計約百五十個、指輪六十個（合計時価約五十万円）を奪った。<sup>32)</sup>

ここに自己カテゴリー化という暴動における攻撃の論理が、いつの間に「カテゴリー力」を弱めてしまうという逆説が生じる。他方暴動をとおして自己をカテゴライズすることのできない労働者の間からは、「厭戦気分」が数多く表明されてくるのである。

こんなことばかりしてるから、西成のアンコは程度悪いわれるんや。わしら、何もしとらへん。そやのに、西成は悪い、悪い、いわれる。だいたい、こんなこと続けてたら、メシ食えんようになるわ。なんとかならんかいな。<sup>33)</sup>

一日仕事してやな、帰ってきてやで、なぜ…お前そやろ、やらないかんねん。そんなん馬鹿げとるよ、考えてみたら。これははっきり言うたるよ。だからな、はっきり言うてやな、俺らかてやなあ…ちょっと待ちいな、ちょっと待ちいな、俺らかて一般民衆やけどなあ…一労働者やけど、しかしあんまりしつこうにやるからやな…。ほんまに見てみいな、皆怒っとるよ、はっきり言うて。あんまりひつこすぎるよ。しかしこういうことはな、もう二度とやめて欲しい訳や。西成にな、こういうことはな、大きな声、まあはっきり言うて出してやっとなるやろ、余所に聞こえるやろ、余所に聞こえたら、「また西成の人間はなあ…」「あ、また暴動やっとな」

と…。「あー、西成の人間は、もう全然仕事いうたらいかんで」と…。仕事が減るばかりでな。ということは結局、俺らも一労働者やけどな、ひとつのプライドっちゅうの持っとるわけや。プライド持っとったらな、そんななあ、訳のわからんことするもんじゃないの！<sup>34)</sup>

こうして「所有者」を失った暴動は、労働者の日常の生活世界と結びついた規範性を希薄にさせ、略奪という「個人的犯罪」の出現をも許し、「波」を自ら終息させたのである。

## 2) 暴動の反復と「自壊」

最後に、釜ヶ崎暴動の「波」の説明に関わる(3)の問い(「第一の波」と「第二の波」の間の差異)に対して、本稿の立場からの解釈を示しておきたい。

確かに暴動初日のきっかけとなった事件や出来事、また暴動期間中に用いられた攻撃対象や手段といった側面でのみ捉えた場合、「第二の波」は、平川が指摘するように、相対的に労働運動性の

表②：集団不法事案の発生状況

| 回    | 発生年月日             | 原因                                   |
|------|-------------------|--------------------------------------|
| 第1次  | 昭和36年(1961)8月1日   | 交通事故死者の遺体処理をめぐる                      |
| 第2次  | 昭和38年(1963)5月17日  | 長雨による求人減によって                         |
| 第3次  | 昭和38年(1963)12月31日 | 年末の求人減によって                           |
| 第4次  | 昭和41年(1966)3月15日  | 酒屋店員と労働者のトラブルから                      |
| 第5次  | 昭和41年(1966)5月28日  | 消防車の火災現場への到着をめぐる                     |
| 第6次  | 昭和41年(1966)6月21日  | パチンコ店員と労働者のトラブルから                    |
| 第7次  | 昭和41年(1966)8月26日  | 果物店店主と労働者のトラブルから                     |
| 第8次  | 昭和42年(1967)6月2日   | 食堂店員と労働者のトラブルから                      |
| 第9次  | 昭和45年(1970)12月30日 | 年末の求人減によって                           |
| 第10次 | 昭和46年(1971)5月25日  | 無理就労による求人連絡員と労働者のトラブルから              |
| 第11次 | 昭和46年(1971)6月13日  | 簡宿管理人と飲酒労働者のトラブルから                   |
| 第12次 | 昭和46年(1971)9月11日  | 果物店店主と労働者のトラブルから                     |
| 第13次 | 昭和47年(1972)5月1日   | 釜ヶ崎メーデーで労働者が検挙されたことに対し、極左暴力集団が抗議したこと |
| 第14次 | 昭和47年(1972)5月28日  | 求人業者と野鳥の会(釜共闘の前身、現釜日労)との抗争から         |
| 第15次 | 昭和47年(1972)6月28日  | 第14次事件の一斉検挙に対する釜共闘の抗議から              |
| 第16次 | 昭和47年(1972)8月15日  | 釜ヶ崎夏祭り中、公妨の少年を検挙したことに対し、釜共闘が抗議したこと   |
| 第17次 | 昭和47年(1972)9月11日  | パチンコ店の機械が故障して閉店したこと                  |
| 第18次 | 昭和47年(1972)10月3日  | 大阪社会医療センター職員の患者取扱いをめぐる釜共闘が抗議したこと     |
| 第19次 | 昭和47年(1972)10月10日 | 釜共闘が求人業者をつるしあげたことに対し、求人業者が角材等で反撃したこと |
| 第20次 | 昭和48年(1973)4月30日  | 釜共闘が「釜ヶ崎メーデー当日暴動を起こそう」と扇動したこと        |
| 第21次 | 昭和48年(1973)6月14日  | 釜共闘が「建設現場で泥水を飲まされた」と壁新聞であおりたたてたこと    |
| 第22次 | 平成2年(1990)10月2日   | い集現場において釜日労が、職員の不祥事を取り上げあおりたたてたこと    |

[大阪府西成警察署防犯コーナー, 1991: 34]

格を有しているといえなくもない。例えば、警察による暴動発生原因の整理を見てみると、昭和45年（1970）以前の暴動に関しては、「トラブルから」という原因がほとんどであるのに対して、それ以降では「メーデー」「抗議したことから」といった表現が目立つ。さらに昭和47年（1972）、昭和48年（1973）には、記録されている9件のうち7件までに「釜共闘<sup>35)</sup>」の名前が出てくる[表②]。しかもこのような認識は、当時釜ヶ崎において日雇労働者のための労働運動をおこなっていた関係者の認識とも概ね一致している。

一九七一年五月暴動以来、学生扇動説がかなり定着したが、実態としては元学生とか学生くずれ、学生あがりと呼ばれてやむを得ない者が、活動家として居ついているということであろう。<sup>36)</sup>

このようなことから、釜ヶ崎における暴動の「第二の波」をもって、「釜共闘」を主体とした労働運動の一種と捉えるか、「釜共闘」に扇動された組織的な破壊活動の一種と捉えるかは、単に、暴動という現象を捉える際のイデオロギー的な立場の相違に過ぎない。むしろ、両者に共通する点は、一見そのイデオロギー的立場が真っ向から衝突する双方の見解において、1970年代の暴動は、「釜共闘」という日雇労働者よりの闘争組織の強い影響下にあったという認識である。先に紹介した平川による釜ヶ崎暴動の「第二の波」の性格付けは、このような前提があればこそ出てくるのである。

だが、本稿での分析が示すように、暴動の継続と反復という視点から暴動の辿った道筋を捉えるならば、その道筋において一定の影響をもつ主体が現れるかどうかとは関わりなく、ひとたび始まった暴動は、攻撃の拡散という現象を通して、やがて誰の手からも放れてしまうという「自壊のメカニズム」を内包しているのである。それは暴動が継続し、反復されるということ自体が発動させていたのである。暴動の「ゲリラ化」が初めて報じられたのは、「釜共闘」結成の遙か前の昭和42年（1967）時点なのである。暴動の「第二の波」が始まった直後から、釜ヶ崎暴動で初めて本格的な略奪が生じるのは、こうした自壊のメカニズムの行き着いた結果を象徴している。

じつはそのことを、統制側の警察や行政は経験的に知っている。攻撃対象が払底し、メタ・コントラスト・レベルが低下し出す頃、そのときに統制や制度化のエージェントが待ちに待った「鎮圧」の時なのである。なぜなら、暴動が「カテゴリー力」を低下させ、一体誰のものか分からなくなった瞬間、そこに集まる群集は、孤独な個人の集合、「烏合の衆（le foule<sup>37)</sup>）」に過ぎないからである。そのとき、統制側の鎮圧行動は、群集の側からの集合的な反作用を呼び起こさない。群集は集合的逃走（パニック）状態となり、もはや鎮圧が去った後に再び集合することはなくなる。

したがって、釜ヶ崎暴動の「第二の波」は、本稿で指摘した「自壊のメカニズム」という点では、「第一の波」と同様のメカニズムを始まると同時に発動させ、しかも反復の観点から見た場合、より攻撃対象の拡散と攻撃単位の小細は進んだとみることができる。その意味では、「第二の波」は、「第一の波」と同じであるどころか、むしろ「自壊」のスピードを加速させたともいえるのである。もちろんこのような「自壊のメカニズム」だけが、釜ヶ崎における暴動の収束要因だったわけではないが、少なくとも釜ヶ崎暴動の場合、始まると同時に、やればやるほど敗色が濃厚になることを運命づけられていたことは確かである。なぜなら、暴動とは、集合的暴力を通じた自己カテ

ゴリー化の運動である以上、釜ヶ崎のような狭く閉ざされた空間における暴動は、攻撃対象の急速な払底によってメタ・コントラスト・レベルを下げる方向でしか継続・反復させることができないからである。

## おわりに

筆者はすでに、昭和36年（1961）8月に生じた「釜ヶ崎第一次暴動」をとりあげ、暴動期間中にみられる攻撃の規範性を、労働者の意味世界との関係のなかで解釈する試みをおこなった<sup>38)</sup>。そこから見いだされた知見は、暴動という形態をとる集合的暴力が有する非日常性は、決して参加者の日常性から完全に遊離した形で展開するわけではないということであった。

ただし、暴動という巨大なエネルギーの流出が、終始参加者の日常性に基礎づけられたかたちで展開するわけではない。暴動は、参加者の日常性に基礎づけられつつも、常にそこからはみ出す契機を孕みつつ展開していくのである。日常性に基礎づけられた非日常性が、日常性から遊離していく道筋は、釜ヶ崎暴動の場合「自壊の論理」と呼べるものであった。

この「自壊の論理」は、暴動の2つの「波」を通じて同様にはたらき、さらに一層加速した形で進行したといえる。したがって、「第二の波」において「釜共闘」による暴動の「指揮」の試みが見られるにせよ、それは「初期段階において、自覚的に暴動の組織化を行おうとしたアクターの存在した暴動」というにすぎず、暴動は以前よりもより一層急速に自壊するようになったのである。そのことは、1960年代に比べて明らかに個々の暴動の日数が短期化し、その「強度」が弱くなったことにも表れている<sup>39)</sup>。

その後、昭和48年（1973）10月の暴動以降、16年間もの長い「沈黙期」を経て、釜ヶ崎暴動第三の「波」が発生する。だが、この期を構成する2回の暴動は、自壊の論理の観点からみると、それまでの釜ヶ崎暴動の全過程の百花斉放的縮図であった。すなわち、たった2回で、過去における釜ヶ崎暴動の2つの「波」を早回しにしたかのように展開し、そして急速に自壊したのである。

そして、平成20年（2008）6月13日。もはや起こるはずがないと思われていた暴動が、再び釜ヶ崎で起こった。しかし、この「事件」に対するマスコミの反応は、ほとんど「黙殺」に近いものであった。G8開催期間中という政治的理由による報道統制や、東北地震の災害報道に国民の関心が集中していたことも大きな理由だが、その背後には、群集事件がもはやニュースバリューをもたなくなったということがあるだろう。もっといえば、群集事件に対して関心を持たないということが、メディアにとっても、受け手にとってもひとつの政治的コードとなったかのようである。それは、平成2年（1990）暴動では、東西ドイツ統合という歴史的ニュースを押しつけて、各紙が連日盛んに報道したのと対照的である。90年暴動時は、警察と市民の信頼関係というフレームに乗せることで、社会問題として暴動が語られたが、今回は、底辺社会の人権問題のフレームにも、警察と市民の信頼関係というフレームにも、そのほかの社会問題化のフレームにも乗せられることなく、事実経過の報道に基本的に終始していた。それは、社会編成原理にそぐわない異物を不可視化することをとおして排除してきた近代社会の社会的コントロールの視線がたどり着いた地点でもあるのだが、繰り返される暴動を通した「自壊」の反復が、黙殺という政治的コードの定着に手を貸したとも言えるのではないだろうか。

暴動はどのようにして終息するのか。たしかにすべての暴動は、いずれは終結する。そして終結

後の時点から見た場合、それは統制側の鎮圧行為の結果である。もう少し穿った見方をすれば、統制側の鎮圧行為を容易にするような、暴動の「純粋性」を汚す攪乱要因が外部から挿入されることによって、暴動が暴徒へと瓦解した結果として、暴動は終結すると捉えることもできる。たしかにこのような理解が全く間違っているわけではない。むしろそれは、ほとんどの暴動の終息過程について当てはまる説明ではある。けれども、そういった要素に加え、そしてそれらとは異なる水準において、暴動はそれ自体として、続けようとするほど瓦解への道筋を辿るという、固有の自己崩壊の論理を内包しつつ展開することについては、これまで誰も指摘してこなかった。それはいわば、「自壊の論理」である。この「自壊の論理」は、統制側の鎮圧行為の強烈さや、暴動本来の純粋性に対する外部要因の挿入とは別の水準においてはたらく、暴動に本質的に備わる論理である。だから、この論理の前には、「もしも統制側の鎮圧戦略が的はずれだったら」とか、「もしも不純な輩が生じないようにうまく暴動を指揮していたら」とかいった、事後的なシミュレーションは一切通用しない。この「自壊の論理」は、鎮圧戦略が稚拙であろうがなかろうが、不純なフリーライダーが発生しようがしなかろうが（もっともそうした条件は、暴動が終結する時期を左右するだろうが）、暴動という現象がいったん生じたなら必然的に展開する「鉄の論理」なのである。

#### 注

- 1) 某在阪テレビ局の映像資料より (1971. 6. 5.)。
- 2) 清涼 [1961: 173]。
- 3) 「DFA 仮説」とは、人種間の差別的な機会の不平等や経済的格差などの何らかの剥奪状況 (Deprivation) が、マイノリティ集団に認知的な不満 (Frustration) を増大させ、それが何らかのきっかけを弾みに集合的な反抗 (Aggression) を生じさせると考える原因論である。マクファイルは、この仮説を前提とした暴動への個人の参加に焦点を絞った 10 本の報告が提出している知見を再検証した。その結果、相関が比較的高いと認められる場合においても、それぞれの報告に特有のバイアスに影響された疑似相関である可能性を指摘する。例えば、警察への不満が暴動参加を促したとの知見は、ミルウォーキー暴動の事例を扱ったただ 1 つの報告から出されており、しかもそこでのサンプルは、暴動を通して警察に逮捕された者である。このことを考慮に入れたとき、警察に対する不満が暴動参加の原因になったというよりは、暴動への参加を通して警察から受けた取り扱いが警察への不満を生み出したと考えた方がより自然な解釈ではないだろうか。このようにマクファイルは、(一般に考えられているような) 暴動の発生と剥奪状況との間の直接的な連関性を前提とした研究が提出した知見は、極めて問題の多い前提に寄り掛かっている可能性が高いことを統計的に立証したのである [McPhail, 1971]。
- 4) アブデュらは、1965 年のロサンゼルス暴動における出来事の推移過程を時空間的にマッピングした結果、暴動は単純に隣接地域へと放射状に広がるわけではなく、その空間的散らばりは不均質で、点と点をつなぐようなかたちで広がっていること、また、略奪と放火について注目すると、それらが同時に起こることはほとんどなく、両者が全く別の論理で生じていることを指摘した [Abudu et al., 1974]。
- 5) 例えば Burbeck et al. [1978]。
- 6) 例えば Midlarsky [1978]; Pitcher et al. [1978]。
- 7) 18 世紀から 19 世紀にかけてのイギリスにおける食糧暴動 (food riot) の発生パターンの分析をおこなったボーステッドは、暴動の動的過程に関する諸研究を、「発達」「拡散」の二局面に分けて整理しているが、本稿で指摘する「終息」局面は、発達局面のなかでの「疲弊過程 (fatigue process)」あるいは「消極的感染 (a negative contagion)」として触れているだけである [Bohstedt, 1994: 290-1]。
- 8) このような「動員／統制モデル」の洗練されたものとして、公衆を加え、ドラマトゥルギー・アプローチで分析するもの [Snow, 1979] もあるが、それでも、エスカレートへの傾性を保持し続ける群集と、鎮圧への傾性を保持し続ける統制側という二項対立の図式は保たれている。
- 9) Skolnick [1969]; Linchbach [1987]。
- 10) Bohstedt [1994: 299]。

- 11) また、リンチバックは、反抗集団に対する体制側の抑圧の効果について、政府による圧迫が暴力活動の抑止に対して正／負どちらかの効果を持つという前提（「抑圧／抑止連関（the repression/dissent nexus）」）を批判し、合理的の行為者モデルの見地から、政府による抑圧が、反抗集団を暴力に向かわせることもあれば、それを抑止することもあるという事実を数理的に説明している。そのモデルからは、以下の3つの命題が導き出される。①統制側による強制力の行使は、非暴力活動を減じ、暴力的活動を増加させる。②反抗集団の抗議活動を常に抑圧することは、反抗集団による、より効果的でない戦略を減じるという逆説的な事態を生む。③政府の姿勢が一貫していれば、暴力への抑止力が弱まるが、非一貫性は、抑止力を逆に高める [Lynchbach, 1987]。
- 12) 大阪府西成警察署防犯コーナー [1993: 4]。
- 13) ただし、今回の事件を実態としてみれば、過去の暴動のレパトリーを踏襲した暴動そのものであるにも関わらず、警察は「暴動」として認定しなかった。このことは、群集事件に対して関心を持たないということが、それを報道するメディアにとっても、その報道を受け取る受け手（大衆）にとっても、ひとつの政治的コード（暗黙の合意）となってしまうという社会状況を反映しているのかも知れない。つまり、現代において群集は、黙殺による不可視化という社会的排除の対象となってしまったのである。
- 14) 大阪府西成警察署防犯コーナー [1991: 35]。
- 15) 釋 [1973]。
- 16) 例えば、西成警察署による暴動のカウント数が、昭和47年（1972）から昭和48年（1973）にかけて目立って増加しているが、これは（後述するように）1970年代以降、釜ヶ崎に流入してきた学生運動活動家たちによって設立された「釜ヶ崎共闘会議」の活動に対する同警察署の警戒感と取締活動を色濃く反映したものであろう。
- 17) この困難さの一因として、「寄せ場」としての釜ヶ崎独特の性格が挙げられるだろう。すなわち、ホームレスとしての日雇労働者が密住する「ドヤ街」である釜ヶ崎では、「い集」や「不法事案」は、ある意味で日常的な出来事でもあるからである。
- 18) これら2つの「波」のうち、ひとつめの「波」は60年安保と、ふたつめの「波」は70年万博景気の終焉および全共闘の挫折と、90年代はじめに生じた2回の暴動はベルリンの壁崩壊に象徴される東欧再編と時期的に重なっており、それぞれ全体社会における大きな社会変動との関連を示しているようにみえて興味深い。そのような「波」発生の原因論への問いは、本稿での課題の範囲を超える。
- 19) 平川 [1994: 33-35]。
- 20) Hobsbawm [1964=1968]。
- 21) 『朝日新聞（大阪版）』1961. 8. 3.
- 22) 吉田 [1994]。
- 23) 『産経新聞（大阪版）』1961. 8. 4.
- 24) 大谷 [1972: 281]。
- 25) スタークらは、1965年のロサンゼルス暴動の分析から、同様の時間的サイクルを指摘している。また彼ら、全体の暴動を、一日ごとの「小さな暴動（mini-riots）」の連鎖として捉えた方が適切であるとし、その複雑な連鎖のダイナミクスを説明することの必要性を指摘している [Stark et al., 1974]。
- 26) 『読売新聞（大阪版）』1967. 6. 5.
- 27) 『読売新聞（大阪版）』1971. 5. 27.
- 28) Turner [1987]。
- 29) 小玉・戸梶 [2010: 56]。
- 30) Reicher [1984]。
- 31) これ以前から、商店への攻撃はあったが、それらはあくまでも店の破壊が目的であった点において決定的にその性格が異なる。
- 32) 『朝日新聞（大阪版）』1971. 6. 15.
- 33) 『朝日新聞（大阪版）』1971. 5. 30.
- 34) 某在阪テレビ局の映像資料より（1971. 6. 5.）。
- 35) 「暴力手配師追放釜ヶ崎共闘会議」。建設労働などに従事する日雇労働者の就労を斡旋する「手配師」との求人を探るトラブルに対処する闘争組織として、1971年末頃に結成された [寺島, 2013: 186]。
- 36) 寺島 [2013: 184]。
- 37) 群衆心理学の祖としてあまりにも有名なル・ボンの『群衆心理』の原題は“Psychologie des foules”であ

る [Le Bon, 1895 = 1993]。一般的なイメージとは異なり、この書でル・ボンは群集の理解を目指したのではなく、群集をモチーフとして大衆社会批判を目指していた。その意味で、この書のタイトルは『烏合の衆の心理学』、あるいは『大衆心理学』であらねばならなかった。

38) 吉田 [1994]。

39) 逆に、暴動鎮圧の役目を担う警察にとっては、自覚的なアクターの存在は、彼等の鎮圧行為の正当化を一層容易にした。このことも、1970年代の暴動がおしなべて短期的な暴動に終始したことの重要な要因である。

#### 参考文献

大阪府西成警察署防犯コーナー, 1991, 『あいりん '91-白書 30 年特集号-』。

大阪府西成警察署防犯コーナー, 1993, 『'92 あいりん地区の実態-平成 4 年版-』。

大谷民郎, 1972, 『ニッポン釜ヶ崎-地図にない町-』 番町書房。

釜ヶ崎資料センター, 1988, 『資料釜ヶ崎』 5。

小玉一樹・戸梶亜紀彦, 2010, 「組織同一視の概念研究-組織同一視と組織コミットメントの結合-」『広島大学マネジメント研究』 10: 52-66。

釋智徳, 1973, 「大阪貧民史の研究 1」華頂短期大学『研究紀要』 17: 91-166。

清涼信泰, 1961, 「釜ヶ崎-その未組織のエネルギー-」『別冊新日本文学』 2: 167-174。

寺島珠雄, 2013, 『釜ヶ崎語彙集 1972-1973』 新宿書房。

中筋直哉, 1992, 「巷に燃える火-日比谷焼き討ち事件の火の意味-」『ソシオロギス』 16: 195-212。

平川茂, 1994, 「『暴動』から見た寄せ場の文化」, 『市政研究』 103: 32-39。

吉田竜司, 1994, 「群集行動と日常性-釜ヶ崎第一次暴動を事例として-」『ソシオロジ』 39(2): 75-95。

Abudu, M. J. S. et al., 1974, "Some Empirical Patterns in a Riot Process," *American Sociological Review*, 39: 865-876.

Bohstedt, J., 1994, "The Dynamics of Riots: Escalation and Diffusion/Contagion," in M. Potegal & J. F. Knutson (eds), *The Dynamics of Aggression: Biological and Social Processes in Dyads and Groups*, Lawrence Erlbaum Associates: 257-306.

Burbeck, S. L. et al., 1978, "The Dynamics of Riot Growth: An Epidemiological Approach," *Journal of Mathematical Sociology*, 6: 1-22.

Hobsbawm, E., 1964, *Labouring Men: Studies in the History of Labour*, George Weidenfeld and Nicolson Ltd. = 鈴木幹久・永井義雄 (訳), 1968 『イギリス労働史研究』 ミネルヴァ書房。

Le Bon, G., 1898, *Psychologie des Foules*, Alcan. = 櫻井成夫 (訳), 1993 『群衆心理』 講談社。

Lynchbach, M. I., 1987, "Deterrence or Escalation?: The Puzzle of Aggregate Studies on Repression and Dissent," *Journal of Conflict Resolution*, 31: 266-297.

McPhail, C., 1971, "Civil Disorder Participation: A Critical Examination of Recent Research," *American Sociological Review*, 36: 1058-1073.

Midlarsky, M. I., 1978, "Analyzing Diffusion and Contagion Effects: The Urban Disorders of the 1960s," *American Political Science Review*, 72: 996-1008.

Pitcher, B. L. et al., 1978, "The Diffusion of Collective Behavior," *American Sociological Review*, 43(1): 23-35.

Reicher, S. D., 1984, "The St. Paul's Riot: An Examination of the Limits of Crowd Action in Terms of a Social Identity Model," *European Journal of Social Psychology*, 14: 1-21.

Skolnick, J. H., 1969, *The politics of protest: a report*, Simon and Schuster.

Snow, D., 1979, "A Dramaturgical Analysis of Movement Accommodation: Building Idiosyncrasy Credit as a Movement Mobilization Strategy," *Symbolic Interaction*, 2: 23-44.

Stark, J. S. et. als., 1974, "Some Empirical Patterns in a Riot Process," *American Sociological Review*, 39: 865-876.

Turner, J. C., 1987, *Rediscovering the Social Group: A Self-Categorization Theory*, Blackwell Publishers. = 蘭 (他訳), 1995 『社会集団の発見-自己カテゴリー化理論-』 誠信書房。